

部隊略歴 歩兵第百四十一(東隊)

年月日	概	要
自昭七、三、三 至七、三、三 西南太平洋 洋へ戦進	一 戦進 東隊主力は「マニラ」市防工一部(工隊II A)は中部呂宋に在りて勘定依 賊に参加中十一、十三日急遽西南太平洋への戦進を命ぜられ同月二十七日「マニラ」 「港」を敵空海哨戒至敵有る大洋を海軍艦艇により前進十三日「マニラ」 「リテン」島に上陸す 二 矢力 東隊長陸軍大佐 中嶋正司 以下 勲二、三、三名 一 田ノ浦地区警備	
自昭七、三、四 至八、四、三 南太平洋戦		
自昭八、五、一 至八、五、三 第一次セブ島戦		
自昭八、三、一 至八、四、八 第二次セブ島戦		
自昭九、四、三 至九、五、三 第三次セブ島戦		

第六十五旅團工兵隊略歴

年月日	概	要
<p>自昭七二二七 至七三三三 西南太平洋 洋への戦 進</p>	<p>一 戦進 部隊は北緯北緯各地に分散戦定依戦に従事中十一月二十四日の半数を残留し主力は西南太平洋への戦進を命ぜり小急遽戦進準備を完了し同二十七日マニラ港を公明途中等戦を履にしつゝ三月三日ニューブリテン島コラバウルに上陸す</p> <p>二 兵力 隊長陸軍少佐堀地芳憲以下一八三名</p>	<p>一 糧食設備並に戦斗訓練 部隊は主として田ノ浦又は赤根岬に在りて糧食且執拗なる敵戦の爆撃を冒して初期は主として敵前上陸戦斗訓練を重んじ寸暇を惜めて部隊糧食設備を完成し後期は主としてコラバウルを中心とする主要幹線道路の補修設定並に各飛行場の補修整備に任せり</p> <p>二 兵力 隊長陸軍少佐 堀地 芳憲 以下 一八二名 此の同内地遷送下士隊一三名 補充見習士官二名</p>

(405)

1323

年月日	概要
自昭八、五、一 至「八、三、三」 第一次 ビスマル フ敷	<p>一 陣地構築並に飛行場及道路の補修設定部隊は五日同最「ツルブル」に戦進激烈なる敵機の空襲下懸天障を穿して「ツルブル」附近主要幹線路並飛行場の補修設定に任ぜり後部隊長は「ツルブル」警備隊長を命ぜり川所在部隊を併せ指揮へ又は区處して水際陣地構築に専念せり</p> <p>二 兵力 隊長陸軍少佐植地芳彦以下二二八名此の同帰還將校一名患者稱杖以下六名 第三次補充兵三九名 第四次補充兵一四名</p> <p>一 道路及舟艇秘泊地の補修設定 部隊は「メタモ」附近「マガイラプア」に移動し人愈々激烈を加へる敵空襲下補給難にも屈せず主として主要道路の補修舟艇秘泊地の設営に邁進せり</p> <p>二 上陸部隊との攻撃戦 十二月十六日夜半敵軍「ツルブル」附近一帯に上陸を開始するや部隊は早慶一都を歩兵第百四十一連隊長の直接指揮下に入らしめ主力は歩兵第五十二連隊第二大隊に協力「メタモ」兵站附近に出没し所在部隊と協力敵上陸を阻止し勇戦せり</p>

年月日	概 要
戦 7 百路一九四二 至一九四三 第三次 ビスマルク 戦	<p>歩兵第百四十一連隊長の指揮下に入りたる一部は連隊と共に「ナタモレ」附近三角山万壽山の攻取に参加奮戦せり</p> <p>戦線整理後は部隊を東結主として主要補給路の固守に任せり</p> <p>「カ」号作戦</p> <p>一月二十七日「カ」号作戦開始せらるや部隊は終始掃田より先遣多大の困難を克服能く其の進路開戦の任を果し四一九日「ラバウル」附近「トーマ」に到着せるも其の敵部隊兵力之割に過ぎず</p> <p>四 兵力 隊長陸軍少佐坂地芳辰以下一〇九名 要送患者大 戦士下士官以下一六名</p> <p>一 陣地構築並に主要道路の補修設営</p> <p>部隊は「トーマ」に在りて作戦支障陣地の構設に主要幹線路の補修備長速藏に任じつ、寸暇を惜みて地下棲息設備の構築並に現地自給に邁進せり</p> <p>二 兵力 部隊長陸軍少佐坂地芳辰以下二二一名 要送患者下士官以下一二名 戦士下士官以下一〇名</p>

4
の外

東ニユ一

年月日	概要
自昭一九二一 至、三、四一五 第五次 「バスメル」 戦	戦入將校以下一一名 四月二九日 比魯殘置隊若林中尉以下一三五名主力に合す 一 陣地構築並に主要幹線道路の補修決定 部隊は主として各地砲兵陣地地下構築並に主要幹線道路の補修決定に任じ つ、各種戦術訓練に努力を傾倒しつ、寸時をも利用して現地自活に邁進せ り 二 兵力 部隊長陸軍少佐坂地芳原以下二一七名入並(除籍)

第六十五 旅團通信隊略歴

年月日	概	要
自昭二、三三 至昭二、三三 西南太平洋 洋への戦 進	一 戦 進 部隊は北島北部の各地に分散戦死作戦に従事中二、三四両半数を残留し主力は西南太平洋への戦進を命ぜらるる急遽戦進準備を完了 同月二十七日「マニラ」港を占領途中警戒を厳にしつゝ、十二月三日「ニューブリテン」島「ラバウル」に上陸す 二 兵力 部隊長陸軍中尉松本政行以下一〇六名	
自昭二、三四 至二、八、四ニマ 西南太平洋戦	一 宿営施設並に戦斗訓練 部隊は主として旅團司令部——直轄部隊及軍司令部同並に飛行場警備隊(四)間の有線連絡に任ずる外宿営施設を完成しつゝ、束る可き作戦に備へ上陸訓練通信訓練を実施せり 二 兵力 部隊長陸軍中尉松本政行以下一〇六名	
自昭二、八、五 至二、八、二〇 塞次ビズルク 戦	一 有線網構成警備通信連絡実施 部隊主力は五月十一日同島「ツルブル」に戦進熾烈なる敵機の空襲下悪天滄瀾を冒し「ツルブル」附近諸部隊間の有線網構成並に「ガブレ」「ラバウル」「ニ」	

8561

(409)

1327

年月日	概要
自昭二八二一 至二九四二八	<p> 一 有無線網構成整備通信連絡実施 第一次トビヌマルクニ戦に引籠る敵隊の銃爆及自然障礙等を 排除し極力各部隊間の連絡を確保す 二 敵上陸部隊との戦斗 十三日拂曉敵軍「ツルブル」附近一帯に上陸するや直ちに整備通信態勢を 戦斗態勢に切替へ有線は主として歩兵第百四十一連隊歩兵第五十三連隊と 旅団司令部間無線は両連隊の外依然「ラバウル」ニル最及後方各基地との 連絡を確保す 三 「カレ」号作戦 一月二六日「カレ」号作戦開始せらる、や部隊は兵力弱が、天候等の各種悪条 件を克服し旅団司令部―各梯団及「ガブル」「ラバウル」間無線連絡に任じ 四月十九日「トーマ」附近に到着せり </p>

年月日	概要
自昭一九四二 至一九四三 第三次ビスマルク	四 兵力 部隊長 陸軍大尉 渡辺 四郎 以下 約一〇〇名 一 有線網構成整備通信実施着警設備及現地自毛 フトーマレ刑舎と共に轄下各部隊間の有線電路に任ずる外宿警設備を完成 し通信網改修の決定をなすと共に現地自毛に運送せり 二 兵力 部隊長 陸軍大尉 渡辺 四郎 以下 九五名
自昭一九四二 至一九四五 第四次ビスマルク	一 有線網構成整備通信実施並に戦斗訓練現地自毛 依然警備通信に任ずる外通信及各種戦斗訓練に臨進すると共に益々現地自 毛態勢を強化確立せり 二 兵力 部隊長 陸軍大尉 渡辺 四郎 以下 九五名
自昭一九四六 至一九四八 一四	一 有線網構成整備通信実施並に戦斗訓練現地自毛 敵機の各種妨害に排除しつゝ依然警備通信に任ずる外通信及各種戦斗訓練 を実施し其勝利態勢を確立すると共に現地自毛態勢を完成せり 二 兵力 部隊長 陸軍大尉 渡辺 四郎 以下 九五名

第六十五 南洋戦役部隊略歴

年月日	概況	摘要
<p>昭和七、三、二七 至、七、三一 西南太平洋 洋への戦 進</p>	<p>一 戦進 部隊は比島呂宋島北部各地に分散戦守隊に從事中十一月二十四日初半隊を派遣し主力は西南太平洋への戦進を命ぜり八同月二十日主力は艦隊残部は輸送船に依り「マニラ」港を去り十二月四日及十日「エープリテン」島「ラバウル」に上陸す 二 兵力 陸軍軍医大尉 岩本賢次以下一五一名</p>	<p>戦況 一</p>
<p>自昭七、三、二 至、八、四、一 西 南 大 平 洋 戦</p>	<p>一 宿營設備並に患者收養隊準備部隊は宿營施設を完成する と共に病棟建設に邁進し昭六、一、五「ウナリヤ」に患者療養所を開設し患者の收養後送任に任じたり 併せて次期作戦に備へ上陸訓練を実施す 二 收養患者 約四〇〇名 三 兵力 部隊長陸軍軍医大尉 岩本 賢次 以下 一五一名</p>	<p>戦況 一</p>

年月日	概要	摘要
自昭八・五・一 至昭八・五・三 第一次 ビスマル の戦	<p>一、患者收療後送</p> <p>部隊は「ウナリヤ」に於て患者の收療に任じありし處、五月十八日、療養所を閉鎖し、主力は六月九日「ツルブル」に戦進、七月二十六日より「キリゲ」に開設中の第五十一師團第四野戦病院と交代し、熾烈なる敵機の空襲下、発生せる復病者及「ニエーギニヤ」より後送患者の收療後送に任じたり。</p> <p>此の同第五十一師團所獲給水部塚田中尉以下二八名を指揮下に戦死入れしめる。</p> <p>二、收療患者 勲ニツ名</p> <p>三、兵力</p> <p>部隊長 陸軍軍医大尉 岩本 賢次 以下二〇五名</p> <p>一、傷病者收療後送</p> <p>部隊は「ツルブル」に在りて熾烈なる敵機の鋭爆風下、発生せる多数患者の收療後送に臨進せり。</p> <p>二、敵上陸部隊との戦斗</p> <p>七月十六日敵軍「ツルブル」附近に上陸するや、患者の收療に任じ</p>	<p>一</p>
自昭八・二・一 至「九・四・八」 第二次		

は極めて乗り気であつたのであつた。
 「田米園」に臨時搬記留は、

年月日	概	要	摘要
ビスマルク 戦	一 自昭(九)四(九) 至(九)五(三) 第三次 ビスマルク 戦	一 患者收療及現地自活 「トーマ」到着と共に宿営施設を完成し併せて病棟の建設に着手し六月一日病院を開設し旅団隷下部隊の患者收療に任ずると共に現地自活に邁進せり 二 收療患者 飢ニ〇〇名	戦死一 戦病死二
ビスマルク 戦	三 收療患者 飢一〇〇名 四 「カ」号隊 一月二十九日「カ」号隊開始せらるゝや悪天諸種の障害等惡条件を克服して患者の護送実行に努め戦道の途中「コ」ボ「カライアイ」レ「イ」ボギレ「タム」レ河河畔「質武」レに於て患者療養所或は集合所を設置し戦道部隊患者の收療後送任じ四月二十一日「トーマ」附近に到着せり 五 兵力 部隊長陸軍軍医大尉 岩本 賢次 以下一五〇名	三 收療患者 飢一〇〇名 四 「カ」号隊 一月二十九日「カ」号隊開始せらるゝや悪天諸種の障害等惡条件を克服して患者の護送実行に努め戦道の途中「コ」ボ「カライアイ」レ「イ」ボギレ「タム」レ河河畔「質武」レに於て患者療養所或は集合所を設置し戦道部隊患者の收療後送任じ四月二十一日「トーマ」附近に到着せり 五 兵力 部隊長陸軍軍医大尉 岩本 賢次 以下一五〇名	生死不明 二八

1332

1333

(414)

医大尉

佐々木健夫

(昭和16.11.15現在)

17.8.1 / 台北陸病院

医少佐

永山武久

木下守時 (18.8.2 65松司隊)

医中佐 四方卓 (18.8.2 敦明病院)

年月日

概

要

に任ず	大尉に	に任じ	心て忠	一、木	中隊	戦死	戦死	戦死	戦死
	戦死 二	戦死 一			生 死 不 明 二	戦 死 一	戦 死 一	戦 死 一	戦 死 一

摘要

1332

1333

年月日	概 要	備 考
自昭五、四、一五 第四次ビス マルク戦	一 患者收療戦斗訓練現地自活 依然患者收療に任ずる外戦線枚護及各種戦斗訓練に邁進する と共に益々現地自活態勢を強化確立せり 二 收療患者 勅一〇〇名 三 兵力 部隊長 陸軍軍医大尉 岩 本 貞 次 以下一七〇名	
自昭五、四、一六 至、五、八、一五 第五次 ビスマルク 戦	一 患者收療並に戦斗訓練現地自活 敵機の各種妨害を排除し依然患者の收療に任ずる外戦線枚護 及各種戦斗訓練を實施し必勝の態勢を確立すると共に現地自 活態勢を完成せり 二 收療患者 勅一〇〇名 三 兵力 部隊長 陸軍軍医大尉 以下一七〇名	

独立混成第三十九旅団司令部略歴

年月日	概要	摘要
<p>自昭九七・一五 至リ三〇・八・一〇 第三四五次 ビスマルク 作戦</p>	<p>一 旅団編成後、トラバウルと要域に於て第十七師団長の指揮下に 入り、築城訓練、現地自若等諸種の作戦準備に従事す 独立混成第三十九旅団長 陸軍中將 坂本永雄（昭三〇・四・三〇中將）</p> <p>二 終戦後（八月下旬）部隊の集結を豫想し、トラバウルと腰谷は リコタウリルに（登龍と改命す）に移動し、主として現地自若 及疎軍援助作業に従事す。曉濃園及南崎製塩並澳傍班は依然 として生産を疏行せり</p> <p>三 十月頃より東田編成に入り、十月中旬迄に逐次鏡原に移動し、東 田編成業務並前業務を実施せり（第六集團）</p> <p>四 司令部主力は昭和五年五月十六日名古屋に於て復員せり</p>	

6
の
外
東
ニ
ユ
ー

一 備成以来他隊に転属せし主たる部隊（通称号）人員人名

（年 月 日）

第十七師團司令部（月七三八一） 岩坪中佐（昭三、四、二）

第八方面軍司令部（剛七九六）

森 藤 大 佐（昭三、四、二） 渡辺主計少佐（昭三、七、五）

混成第四建隊（忠一一二二）

千田敏医務署長 以下二名（昭三、八、一四）

一 備成に入りたる部隊（通称号）人員の概数及主要なる人名（年月日）

昭和十九年軍令陸甲第六七号並陸軍機密ヲ三二七号に據る臨時備成反

第二八二次援師（復員）下令に據り第四船舶輸送司令部を主体とし左

記部隊を備成昭和十九年七月十五日新立混成第三十九旅團司令部（忠第

一一二三一部隊）の備成を完結す

左 記

（備成年月日は何れも 昭一九七五）

第四船舶輸送司令部（昭二九五）

坂本少将 以下 八三名

第三船田司令部 (暎六一六九) 山田 大尉
 第四船田司令部 (暎六一八八) 大野 曹長 以下五名
 第一野戰船田隊 (暎一九五一) 岸 技術曹長 以下一〇名
 船田砲兵第一連隊 (暎一九五三) 瀧 曹長 以下四名
 第四揚陸隊 (暎六一八四) 小形 主計曹長 以下三名
 海上輸送第五大隊 (暎六一九二) 星 伍長
 船田工兵第一連隊 (暎六一七〇) 岩坪 中佐
 船田工兵第三連隊 (暎一九五六) 尾本 伍長 以下六名
 船田工兵第八連隊 (暎二五〇三) 増田 砲技曹長 以下二名
 船田工兵第十二連隊 (暎二九五八) 石井 曹長 以下二名
 水上勤務第三十一中隊 (剛二三〇〇) 粟村 伍長 以下三名
 水上勤務第三十五中隊 (剛四〇三八) 西口 曹長 以下二名
 水上勤務第三十九中隊 (暎五七二五) 鈴木 曹長 以下五名
 水上勤務第四十九中隊 (暎七〇四二) 市 曹長 以下三名
 陸上勤務第五十六中隊 (暎七〇四八) 関谷 伍長 以下三名
 陸上勤務第一二〇中隊 (暎七二九九) 田口 伍長 以下二名
 第十六兵船派隊 (剛二二九八) 三木 曹長 以下二名
 第十七師田司令部 (月七三八一) 喜部 少佐

以下諭成完結後

歩兵第五十四連隊（月七三八五） 野間主計少佐
第十九軍馬防渡隊（剛五三一九）

于田獸醫務隊長 以下 二名

（昭三、四、桂末）

混成第四連隊部隊略歴

年月日	概要	摘要
<p>昭和十九年七月十五日 至八月二十五日 第四次 第五次 ピスマルク戦</p>	<p>昭和十九年七月十日軍令陸甲第六七号並第二八二号發給(復員)下命更隊はイラバウルに於て船舶工兵第一第三連隊陸上勤務第百二十中隊の各主力第四船舶團司令部の一部を以て編成七月十五日編成完了。編成と共に独立混成第三十九旅団長の隷下に入りイラバウルに内港特に西吹山周辺地区の警備に任ずると共に敵機の襲撃下令を要すしつ、あつちる困苦を要し各種業務作業、必勝不敗の訓練及現地自活等に盡す必勝期に於ての急氣に燃へ作戦準備を進め敵の不攻を待ちつ、終戦時に至る。</p>	

8381

(420)

1339

混成第五連隊部隊略歴 (自昭十九七五至昭二〇八五)

年月日	概要
	<p>一 連隊は昭十九七五日「ラバウル」に於て編成す是時人員 二一〇〇名</p> <p>充当部隊 船舶工兵第八連隊 築田揚陸隊 水上勤第三十五中隊 陸上勤務第百六中隊</p> <p>取員</p> <p>連隊長 中佐 小坂 庫市 第一大隊長 大尉 倉田 箱平 第二大隊長 大尉 萱 辰隆 第三大隊長 大尉 清水 真吾 更隊砲中隊長 大尉 大畑 栄一 通信中隊長 大尉 中川 吉之助</p>

(421)

1340

年月日	自昭一九七五 至二〇八二五
概要	<p>二 更隊は敵成と共に第三十八師団長の指揮に入りコガゼル地 区より南側に亘るコラバウルに要城海岸の整備に任し敵機の 妨害下築城訓練及現地自治作業を行ふ</p> <p>築城は対戦車施設に重兵を置き艦砲射撃及ミロワを際限なく抗 するを目的とし主施設を洞窟式を以て完成し全員対戦車肉攻 手として一人十殺全員五碎覚悟する訓練の精進と相俟ちて中 勝不敗の準備を完成し敵の未攻を待ちつゝ、終戦時に入る</p>
摘要	<p>損傷 六九名</p>

(422)

1341

の 内 三 麻 子 子

独立混成第三九旅団通信隊略歴

年月日	概	要
自昭二九七・一五 至三〇八・一五 第三四・五次 ビスマルク作戦	一、コラバツルに要域保戦の通信勤務 ニ復員（昭三〇・五・一六）	

(423)

1342

戦立退成 第三十九 歳 田 野 戦 病 院 略 歴

年 月 日	概 要
自昭一九四三 至二〇〇八・五 第三、四、五次 ビスマルク 戦	一 病院開設前（至昭一九七三） 大本大尉 以下 四五名 矢倉壕、楯柵、砲壕の構築、隣接部隊の患者の診察 二 病院開設 大本大尉 以下一ニ一名 イ 入院患者の構築並に治療 ロ 入院患者の改善治療（入院患者数一日平均約一ニ〇名） 衛生材料の補給 ハ 現地住民の作業 ニ 復員 完 結（昭三二・五・一五）

その他
昭二二

独立混成第四十旅団司令部部隊略歴

年月日	概	要
自昭一九三七、五 至、一九四五、五 第二次 ビスマルク戦	一 昭一九三七、五、一 ナマタナイレに於て編成完結爾後同地に在りて旅団司令部として同地附近の警備及陣地構築並に現地自若に任ず	戦役死 兵 一 重傷 一
自昭一九四一 至、一九四一 第四次 ビスマルク戦	一 一ニユーアイランドに在りて旅団司令部として同地附近の警備及陣地構築並に現地自若に任ず	戦役死 兵 一
昭和四一、五 至、四一、八 第五次 ビスマルク戦	一 同 右	戦役死 兵 下 一
昭三、五、八 昭二、五、九	一 ニユーアイランドに於て復員のため名古屋港に上陸す 田射集団に編入、復員のため名古屋港に上陸す 名古屋に於て復員	戦役死 兵 下 一 重傷 一

1948 修訂 23

(425)

1344

歩 兵 才 二 百 三 十 東 隊

年 月 日	概	要
自昭西一四 至一六二 中山北江作戦	南支広東省中山県、南海県附近に在りて諸作戦並に討代廟正整備に任ず	
自昭天二三八 至一七二 香港攻勢戦	香港攻勢戦に参加後九龍附近の警備に任ず	
自昭七一九 至一七九 爪哇攻勢戦	連隊主力(第三大隊欠)一月二十九日香港出發、三月一日爪哇野ラエラタンに上陸爪哇攻勢戦に参加す 三月十日より五月三日迄コバンドンレコバダビヤレ附近の警備に任ず 五月三日コバダビヤレ港出發、同月十日スマトラ島コベラロンレ上陸九月二十四日迄コバンヂヤハレに在りて警備訓練に任ず	
自昭七二一 至一七七 南都マトラ作戦	第三大隊は第三十八師団長の頭號となり一月二十日九龍港出發二月十八日スマトラ島コバレンバンレ上陸、南都マトラ作戦に参加後コバハトレ附近の廟正整備に任ず 四月十九日北都スマトラに戦進同月二十三日コタルトンレ着警備並に次期作戦準備に從事す 七月コバンヂヤハレに到り東隊長の指揮下に復帰	

年月日	概 要
自昭一八、九、二五 至一八、一〇、二七 「ガ」露依戦	一 九月二十四日スマトラ島「バ」ラワン港出發同日第一七軍司令官の部下に入 リ十月七日ニエーブリテン島「ラ」バウル上陸同月十五日「ラ」バウル港出 帆 同月十四日「ソ」ロモン群島ガタルカナル島「タ」サフアロング上陸 が露依戦に参加す 昭和十八年一月三十日ガタルカナル島「エ」スペランスに出發二月一日ボー デンビル島「エ」レバンタ上陸駐留す
自昭一八、四、二五 至一八、四、二五 「ロ」モン「及」ビス マルク「及」立修戦 自昭一八、五、一 至一八、五、三〇 第二次ビスマルク 戦	一 三月二十六日「エ」レバンタに出發同月二十八日ニエーブリテン島「コ」ボル上 陸尔後同年十月十五日ニエーブリテン島「ロ」ンディツアに附近に在りて警 備並に次期露依戦準備に在す 一 第三次大隊は八月十一日「コ」ボルに出發 同日ニエーアイルランド島「ナ」マタ ナイルに至り同地並に「サ」モシ附近の警備に任ず 一 第二次大隊は七月十五日「コ」ボルに出發、南東支隊長の部下に入り同月三 十日「ニ」エージョーシヤル島「ム」ンダに上陸「ニ」エージョーシヤル島に依戦 に参加す
自一八、七、二五 至一八、七、二九 「ニ」エージョーシヤル 作戦	一 第二次大隊は七月十五日「コ」ボルに出發、南東支隊長の部下に入り同月三 十日「ニ」エージョーシヤル島「ム」ンダに上陸「ニ」エージョーシヤル島に依戦 に参加す

(227)

1346

年月日	概	要
自昭八、三、一 至、八、五 第二次の五、五 次、ビスマルク、戦	一 八月十八日同島撤退、コロンバガラ、島に戦進し九月十九日同島の警備に任ず 一 九月十九日同島出発、チヨイセル、島、トボーゲンビル、島を経て十月十九日、トニエーブリテン、島、コ、ボ、上陸、後、同島、コロンディツア、レ、在り、十月十九日、トニエーアイルランド、島、コ、ナ、マ、タ、ナ、イ、レ、に至り、連隊長の指揮下に復帰す 一 連隊長カヘ、エ、正、直、を、欠、き、船、勝、第、二、百、三、十、大、隊、を、委、す、レ、は、十、月、十、日、コ、ボ、出、発、トニエーアイルランド、島、コ、ナ、マ、タ、ナ、イ、レ、に、到、り、第、三、大、隊、を、併、せ、指、揮、し、トニエーアイルランド、島、警、備、に、任、ず 一 第一大隊は連隊長の指揮を脱し、依然、コロンディツア、レ、附近に在り警備に任ず 一 昭和十八年十二月三十日第三十八歩兵団長の、トニエーアイルランド、島、到着と、共に其の隷下に入り、南、部、トニエーアイルランド、島、の警備に任ず 一 此の同昭和十八年十月、痛、崎、歩、兵、第、二、百、三、十、大、隊、新、に、編、成、せ、ら、れ、第、八、方、面、軍、司、令、官、の、直、轄、と、な、り、昭和十九年一月以降、トニエーアイルランド、島、岬、附近の警備に任じ、同年五月二十日、トニエーアイルランド、島、に戦進して連隊長の指揮下に入る	

年月日	概 要
昭三、一〇	<p>一 (昭和十九年七月二十五日の改編に際し連隊長の編成に入る)</p> <p>一 又前編改編に據り在「ロンドンドイツ」の第一大隊は独を混成第三連隊の編成に入る</p>
昭三、五一、五	<p>一 昭三、年十月一日至月二日亘り連次「ニユーブリテン」島「トーマス」に戦艦第九集団(龍萬集団)の編成に入る</p>
昭三、五一、六	<p>一 復員のため名石屋港上陸</p> <p>一 名石屋に於て復員す</p>

(429)

1348

年月日	概 要
自昭五三三 至一九〇三 第三次 ビスマル フ戦	一 コエーアイルランドに於の警備（築城訓練の自活） 第二次に引続ぎ同最北部地区の警備 備成改正 昭和十九年七月一日自備成改正に依り街並混成 第四十旅團長隷下に入らしめらる（Ⅱを再建） 連隊長 坂本 康一 以下三六九〇名 三 連隊長 更迭（昭一九一〇、三七） 坂本大佐 補第方面軍司令部付 第十七師團司令部付 山中大佐補街並混成第一連隊長 連隊長 山中大佐 以下三六九〇名
自昭五三三 至一九〇四 第四次 ビスマル 戦	一 第三次引続ぎ同最北部地区の警備 （築城補修訓練、自活） 連隊長 山中兼覚 以下三六〇六名 一 第四次並に引続ぎ警備
自昭五三三 至一九〇五 第五次 ビスマル 戦	一 第四次並に引続ぎ警備 山中 以下三五四八名

(431)

1350

年月日	概 要
一	昭和二十年十一月九日ニューアイランドに於てラドラー出帆 ラバウルへ 南跡に上陸第三裏団の編成に入る
二	第一次内地帰還 昭和三十一年三月日小西大尉以下一五一名南跡出帆内地帰還
三	第二次内地帰還 昭和三十一年三月三日長谷大尉以下一三名南跡出帆内地帰還
四	第三次内地帰還一連隊主力、連隊長以下一四九四名 昭和三十一年五月三日浦賀上陸二六日 復員完結
五	第四次内地帰還(後発隊) 昭三二、一、一日名古屋上陸 復員完結

10
外
12
東
12

独立混成第四十旅 回航兵隊略歴

年月日	概	要	摘要
自昭一九七五 至一九七五 第三次 ビスマルク戦	一 昭一九七五日イビスマルクに祥最「ニューアイルランド」最に於て編成完結 主力を「ナマタナイ」一部を「レマコット」キマダン「イパルス」に置き旅団砲兵隊として同地附近の警備地構築現地自若に任ず	戦死傷 五名	
自昭一九四一 至一九四一 ビスマルク戦第四次	一 「ナマタナイ」キマダン「レマコット」バルイスに位置し同地附近の警備現地自若に任ず	戦死傷 一六名	
自昭一九四五 至一九四五 第三次ビスマルク戦	一 同石	戦死傷 一六名	
昭二〇一ニ	一 「ニューアイルランド」島より「ラバウル」に転進す田射東岬に進入		
昭二五九	復員のため名古屋港に上陸す 名古屋に於て復員す		
昭二五八	復員完結		

独立混成第四十隊 團工兵隊 部隊略歴

年月日	概 要	摘 要
自昭一九七五 至一九一〇、三一 第三次 ビスマルク戦	一 昭一九七五日、トビスマルクに群衆、トニエーアイルランドに トナマタナイレに於て編成完結、爾後同地に在りて隊團工兵隊 として陣地構築並に現地自治に任ず	
自昭五二一 至、三〇、四、一四 第四回、トビスマルク戦	一 トニエーアイルランドに於て、トナマタナイレに在りて旅團工兵 隊として同地附近の警備及陣地構築並に現地自治に任ず	戦死傷四名
自昭三〇、四、一五 至、三〇、八、一五 第五次トビスマルク戦	一 同右	
昭二〇、一、三 昭二一、五、八 昭二二、五、九	一 トニエーアイルランドに於て、トニエーアイルランドに戦死す トガゼルに集団に歸入 復員のため名石屋港に上陸す 名石屋に於て復員	

の 内 未ニユ

独立混成隊四十旅団通信隊部隊略歴

年月日	概要	摘要
自昭和十九年七月三十一日 至昭和十九年八月三十一日 第三次 ビスマルク海峡	一 昭和十九年七月三十一日「ビスマルク」群島「ニューアイルラ ンド」島「ナマタナイ」に於て編成完結 ニ 主力「ナマタナイ」部を「レマエツト」 「キマダン」に 置き有無線通信・同地防空警備 現地自活作業に任ず	戦死 三名 病没 一名
自昭和十九年四月 至昭和十九年四月 第四次 ビスマルク海峡	一 「ニューアイルランド」島「ナマタナイ」 「レマエツト」 「キマダン」に位置し通信業務警備並現地自活に任ず	戦死 二名 病没 二名
自昭和十九年四月 至昭和十九年八月 第五次 ビスマルク海峡	一 同右 「ニューアイルランド」島より「ラバウル」に転進す 本根菜園に輸入資材のため名古屋港に上陸 名古屋に於て復命	
昭和十九年五月 至昭和十九年五月 第六次 ビスマルク海峡		

南東独立混成第四十旅団輜重隊部隊略歴

年月日	概要	摘要
昭和一九七、七、三五 至、九、二〇、三一 第三次 ビスマルク戦	一 昭和十九、七、三五日、ビスマルクに群衆、ニューアイランドに退く ナマタナイに於て備成完結、爾後同地に在りて旅団輜重隊 として輸送業務に従事す ニ 主力は、ナマタナイの一部は、ヤマダン、マコツト、バ ルースに夫々位置す	戦死 三名 戦傷 二名
昭和一九二、一、四 至、二、二六、四、一四 第四次ビスマルク戦	一 ニューアイランドに退く、ナマタナイ、ヤマダン、マコツト、バルースに在りて輸送業務並に警備陣地構築 現地自衛に任ず	戦死 四名 戦傷 三名
昭和二〇、四、一五 至、二〇、八、一五 第五次ビスマルク 戦	一 同右	戦死 一名 戦傷 一名 戦傷 三名
昭和二〇、一、二	一 ニューアイランドに退き、よりフラバウルに戦進す 未根拠地に備入	
昭和二〇、五、一七		
昭和二〇、五、一八	復員のため名古屋港に上陸、同地に於て復員	

(236)

1355

独立混成第四十旅団 野戦病院部隊略歴

年月日	概	摘要
自昭一九七五 至一九一〇、三 第三次ビスマルク 戦	一 昭一九七五日「ビスマルク」祥景「ニューアイランド」銀 「ナマタナイ」に於て編成完結 二 旅団野戦病院として主力は「ナマタナイ」に第二半部は「レ マコツト」に在りて診療業務に従事す	戦死 四名
自昭一九三二 至一九四一 第四次ビスマルク戦	一 「ニューアイランド」銀「ナマタナイ」並に「レマコツト」 に在りて診療業務に従事す	戦死 二名 戦病死 四名
自昭一九四五 至一九八二 第五回ビスマルク戦	同右	
昭三〇一二 昭三五八 昭三五一七	「ニューアイランド」銀より「ラバウル」に戦進す 硫黄東面に歸入 復員のため名古屋港に上陸す 名古屋に於て復員	

独立混成第十四東隊部隊略歴

年月日	概要
自昭一九七五 至一九〇三	昭一九七五軍令陸甲第六十七号に依り「ビスマルク」群島に於て独立混成第十四東隊の編成を下令せらる
第三次 「ビスマルク戦」	昭一九七五 滿成完結、第八方面軍司令官の直轄となる「ヨークレ公長警備」(自昭一九年七月二五日至昭一九年八月三一日) 「ラバウル」海上面の前衛部隊として同島の警備並に戒備準備を命ぜらる 敵本部の界内中部湧水地の第一大隊を南地区第二大隊を北地区第三大隊を湧水地附近砲兵大隊を海岸の主據兵隊に位置せしむ 決戦に備はるため陣地構築、教育訓練及展習等位戦諸準備の完成に鋭意從事す
自昭一九二一 至一九四一	「ヨークレ公長警備」(自昭一九二一、至昭一九四一) 連隊長大佐 榊屋良輔 以下二四八八名
第四次 「ビスマルク戦」	第二機関銃中隊長大尉 井上文夫 第三機関銃中隊長大尉 井尾直藏
自昭一九四五 至一九八一	「ヨークレ公長警備」(昭一九四五、至昭一九八一) 前任務を継行す
第五次「ビスマルク戦」	東隊長大佐 榊屋良輔 以下二四六七名

独立混成第三十四連隊部隊略歴

年月日	概	摘要
自昭二〇、四五 至二〇、八一五 第五次ビスマルク 戦	一 四月十五日編成改正あり左記諸部隊を以て編成せられたり 第十九野戦喜射砲隊司令部 約一ニ〇名 野戦喜射砲第四十七大隊 約五四〇名 同 五十六大隊 約三五〇名 同 六十大隊 約五三〇名 野戦機関砲第二十二中队 約二四〇名 野戦照空第五大隊一中隊 約七〇名 一 主として西飛行場周辺に展開し専ら対空挺戦斗作戦準備に 臨進し陸戦に及ば	戦果なし 損傷 戦死 六名
第八方面軍司令 官の部下 (第十七師團長の 指揮下)		

(490)

1359

独立混成第三十五連隊略歴

年月日	概要
自昭一九四一 至一九四五 第五〇三〇 戦	一、イラバールに對空挺戦斗準備 昭和一九年四月一五日野戦高射砲第三十九大隊同五十八大隊同独立野戦高射砲第三十一中隊同三十七中隊野戦機関砲第二十八中隊同二十七中隊野戦照空第三大隊同五大隊を編合し独立混成第三十五連隊を編成し第三十八師團に對空挺部隊として對空挺戦斗を準備しつゝ、停戦に到る 連隊長 大佐 大里 欽 藏 以下一九八二名

<441>

1360

戦車第八戦隊略歴

年月日	概要
自昭和十一年六月 至二十一年四月三十日 南洋太平洋戦戦	一、ラバウルに附近の整備へ全期間の位置 南崎 1. 七月下旬より三月上旬まで修理 一ヶ八隊を以て大発整備援助を実施す 2. 二月中旬より戦車大砲を以て南飛行場設置援助を実施す 3. 養成自動車中隊へ黒川中尉以下一〇〇名を編成、ラバウルに軍用品輸送を実施す 連隊長 米原大佐 以下七〇名
自一八五、一 至一八六、三 第二次ビスマルク 戦	一、ラバウルに附近の整備及築城作業へ全期間の位置 南崎 1. 八月連隊長は「コ、ボ」地区隊長を命ぜり、以て陸正面陣地構築を開始す 連隊長 米原大佐 以下 七八名
自昭和十一年 至二十一年 第三次ビスマルク 戦	一、ラバウルに附近の整備及築城作業へ全期間の位置 「ゲナンボ」 1. 連隊長は「ブナニホ」戦車出張 根據地構築及「ビタカレンソ」附近 2. 出張隊構築 3. 十九、四、三、戦車中隊長（中隊長 押尾大尉以下一九〇名） 4. 南海第四守備隊第一戦車中隊（隊長 甲斐中尉以下一〇〇名） 「ニエーアイルランド」島に派遣し伊東兵団長の指揮下に入らしむ

年月日	
概 要	<p>自昭一九四一 至二〇四二 第四次ビスマルク 戦</p> <p>戦術部隊 戦車第三中隊(一九〇)歩兵第三〇連隊(一〇最)</p> <p>連隊長 米泉大佐 以下一〇四五名</p> <p>一、ヲラバウルに附近の整備及構築作業(全期間) 位置 グナニバ 主力は、グナニバに根據地構築及各方面偵動路並海軍出張據点補強、刈 空挺陣地補修</p> <p>対空射撃部隊(各隊約二〇名定)</p> <p>二 上月末を目途とし各隊某成(千代倉少佐以下一八〇名)</p> <p>偵察支隊長(東西、ナマシ道北部)構築に従事す</p> <p>三 上月同じく月末を目途とし戦車第三中隊(安岡大尉以下全力)</p> <p>大割谷附近 出張陣地及偵動路構築に従事す</p> <p>四 教育訓練 現地自若</p> <p>訓練</p> <p>内攻訓練 戦車射撃 戦車夜間戦斗 対空便戦斗</p> <p>連隊長 米泉大佐 以下一〇四〇名</p>

13
の
外
ニ
ユ

年月日	概要
自昭三、四、五 至三、八、五 第五回マニラ 戦 計 施	<p> 一、コラバウルに附近の整備及築城作業（全期間）位置グナンボ 七月より主力は依戦支障地東ゴム林附近に於ける支障地構築訓練 肉攻、対空挺戦斗、戦車夜間攻取 東隊は昭十八年三月第八方面軍の隷下に入り初爾崎後、コラバウルに位置 しコラバウルに附近の整備に任ずると共に戦車出張根據地コラバウルに 要城内戦車出張根據地並枝路構築に從事しつゝ、教育、戦斗訓練等は 現地自若に精進し鋭意コラバウルに決算準備に邁進せり </p>

(445)

1364

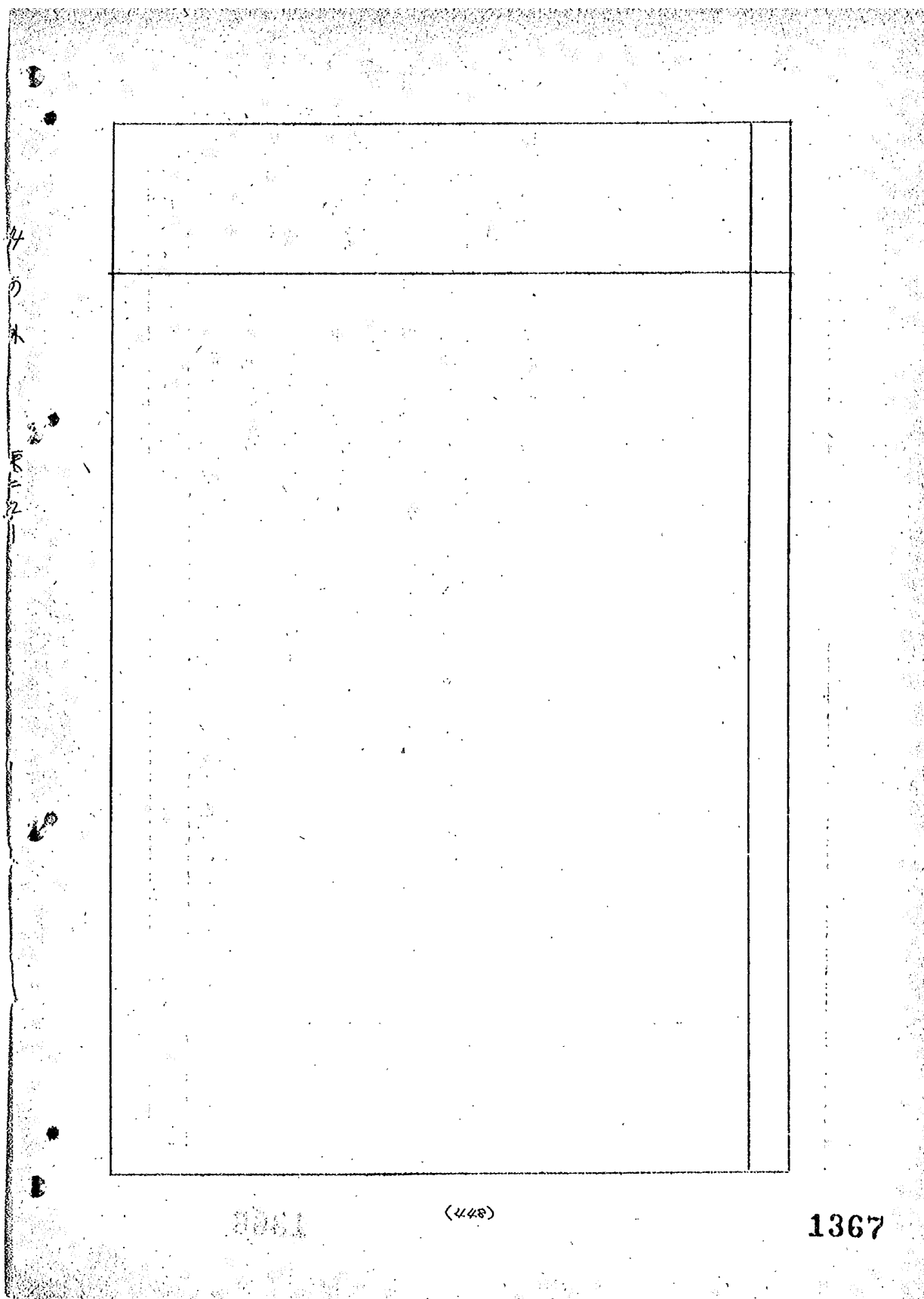
独立海上機動第一大隊部隊略歴

年月日	概要	備考
昭二八・〇二・八 至二八・三・一	第一機動天候隊（臨時編）編成完結	
自昭二八・二・三一 至昭二九・三・五	第一機動天候隊工兵中隊を三輪大隊長（第十七師団）の指揮下に入らしめらる（「タロキナ」並上陸部隊）	
自昭二九・二・一三 第三次大マール戦	新に箱船工兵第三連隊第二中隊を第一機動天候隊長の指揮下に入らしめらる昭二八・三・三到着	第三中隊隊長を尉 徳永（男）は昭二八 師団長より表動隊 隊長に任ぜらる
自昭二九・三・三六 至二九・五・末	重需品緊急分散作業に従軍第一次機動隊以下三〇〇貨物隊長の指揮に入らしむ	昭二九・三・三六 斗に於て戦果 不確実一 備書ナシ
自昭二九・一・一 至二九・五・末	第二次大隊以下五〇〇第三十八師団の指揮下に入らしめらる	
自昭二九・六・一〇	木古浦附近対空戦	
昭二九・七・二五	次期作戦準備の最悪美に秘匿	
自昭二九・一〇・一	独立海上機動第一大隊編成完結	
至昭二九・三・二六 至昭二九・五・二六 自昭二九・一〇・二五 至二九・二・末 自昭二九・一・一 至二九・三・三〇	第一中隊長中尉 渡辺右三以下一〇〇 第十七師団長が指揮下に入り、トロンボイナ上陸部隊 第四中隊長大尉大森以下、第十七師団長の指揮下に入り、トロンボイナ上陸部隊 第三中隊長大尉 柿原敬明以下一〇〇、第三十八師団長の指揮 下に入り、木古浦附近陸地構築	

年月日	概要	摘要
昭和二一、一 至三〇、四一四 第四次ビスマルク 戦	丁オープレ湾丁ワイドレ港方面海上陸準備のため舟艇秘匿 基地設定作業 大尉 山崎 芳郎 以下約四〇 作戦準備	
自昭一九、一 至二〇、八二五 第五次ビスマルク 戦	船舶作戦輸送業務 船舶工兵中隊長大尉野中利保 以下全方及援護歩兵若干	
昭二一、四二五	復員完結	

(447)

1366



4
の
水
1
2

1061

(448)

1367